

表現する喜びを味わう音楽科の指導

—ともに学ぶよさをいかした学習活動を通して—

手塚 淳雄

1 研究テーマ設定の趣旨

本校音楽科では、かねてより必修授業や選択授業のなかで学ぶ楽しさを実感させるために、多様なそれぞれの音楽のよさを味わわせていくことで、音楽活動に取り組む意欲を高め、なお一層広く深く音楽を愛好する心を育てていきたいと考え、研究を進めてきた。ここでは、「学ぼうとする力」（意欲・態度）に視点を当て、授業改善をしていくこと、つまり、授業改善の手だてとして、学習意欲に関わる学ぶ楽しさに着目して生徒の「学ぼうとする力」を育てていきたいと考えた。また、学ぶ楽しさを実感させるために、多様なそれぞれの音楽のよさを味わわせていくことで、音楽活動に取り組む意欲を高め、なお一層広く深く音楽を愛好する心を育てていけるのではないかと考えた。授業改善の手だてを実践していく中で、音楽の授業において「楽しさ」が生まれる状況は「新たな発見による楽しさ」「音楽の技能を習得したことによる楽しさ」「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」の三つに集約されたことがわかった。そこで、平成17年度より、共同研究の全体テーマを受けて、その中の「他者とのかかわりによって生まれる楽しさ」に視点をあてた「表現する喜びを味わう音楽科の指導」を音楽科の研究テーマ、「ともに学ぶよさをいかした学習活動を通して」をサブテーマとして設定し、研究することとした。本校の共同研究では、平成16年度より、生徒の実態調査を受けて、研究仮説を「全教科にわたって意図的・計画的な指導・支援を行うことで、生徒のコミュニケーションする力を育成することができ、本来教科がめざす学力も高められるであろう」とし、3カ年計画で全体テーマを「ともに学ぶよさをいかした学習指導の在り方」、サブテーマを「コミュニケーションする力の育成と活用」として研究に取り組んだ。

2 研究計画

1 第1年次

- (1) コミュニケーションに関する生徒の実態調査
- (2) 音楽科のめざすコミュニケーションする力の捉え方
- (3) とともに学ぶよさに視点を当てた授業改善の手だての検討

2 第2年次

- (1) とともに学ぶよさに視点をあてた授業改善の手だての実践
- (2) 授業改善による生徒の変容調査

3 第3年次

- (1) 授業改善の手だての考察及び生徒の変容調査の検証
- (2) 研究のまとめと今後の課題

3 研究内容

1 第1年次の研究

(1) コミュニケーションに関する生徒の実態調査

本校音楽科では、生徒の様子を知るために、全学年を対象としてアンケート調査を行った。

この結果から、音楽学習に対する生徒の実態は概ね良好な結果が得られたが、できなかったりわからなかったりすることや自分に自信がないことが原因で、音楽学習が苦手であると考えている生徒がいるということもわかった。

(2) 音楽科におけるコミュニケーションの捉え方

本校音楽科では、「言葉を伴いながら音によって他者とやりとりする」ことをコミュニケーションする力と考えた。他者とのかかわりをもつこと、それはコミュニケーションそのものであり、対話力を育てていく。一人の思想や発想より、多くの人たちとの対話から生み出されるものの方が内容も豊かになり、それは表現する技能を高める一因となる。自分と異なる意見や見識と出会ったり、できる限り互いに歩み寄っていったりすることは、人を豊かにすることにつながるのではないかと考えた。また対話力を生かしながら、音や響き、音色などを他者と表現の交換ができることは、個々がもっている表現力や感性を高められることにつながるのではないかと考えた。さらに、自ら学ぶだけでなく、ともに学ぶことは、技能・感性・表現といった力が互いにかかわりあいながらより向上していき、生徒の興味関心を引き出す原動力につながると考えた。

これらを踏まえ、音楽科の研究テーマである「表現することの喜びを味わう」については、以下のように考えた。

音楽の豊かさや美しさを感じ取ったり、それを表現するための工夫を重ねたりする活動を経て得られる感動

これは、「受け止める（音楽をすることにより、感動したり、驚いたりする資質や能力）」「受け入れる（自分なりに音楽の豊かさや美しさを見出すだけでなく、他者の考え方や表現を取り入れることができる資質や能力）」「表現する（自分なりに見出した音楽の豊かさや美しさを、他者に伝えようとする資質や能力）」ことにより、より鮮明に得られるものであると捉えた。そこで、本校音楽科では次のような研究仮説を提示した。

互いのよさを感じ合い、認め合う音楽体験の場を設定することは、感動を共有し、ともに学び合う喜びを感じる心を育み、表現することの喜びを味わうことができるであろう。

様々な音楽活動を通して、音楽そのもののよさを感じ取ったり、他者と一緒に創り上げていくことの喜びを感じることで、感性が磨かれ、感受する力が育つのではないかと考えた。それは、他から認められ、受け取ってもらえることで、自分の持っている感性を十分に働かそうと意欲的になるからである。それは表現する技能の向上へとつながり、様々な音楽と出会ったり、音楽活動したりする中で、感動体験を共有できるのではないか。そして、それは生徒が表現する喜びを味わうことにつながるのではないかと考えた。

2 第2年次の研究

(1) とともに学ぶよさに視点をあてた授業の実践

授業改善の視点である「互いの音楽性やよさを感じ合い、様々な感性に触れることができる教材開発」を中心とした授業として、第3学年「小学4年生との交流会」の実践を試みた。

(2) 授業の実際

1 題 材 混声合唱の豊かな響きを味わおう

2 ねらい 曲にふさわしい表現を知ること、混声合唱の豊かな響きに親しんだり、自分たちの思いや気持ちが伝わる演奏ができる。

3 授業の観点

中学生の合唱を聴く活動は、児童が混声合唱の豊かな響きを感じ取り、このように歌ってみたいという気持ちになるための効果的な手だてであったか。また、曲のイメージを表現したり、美しく充実した合唱を小学生に聴いてもらったりすることは、生徒が合唱活動を通して学んだことをいかす学習として効果的な手だてであったか。

4 展 開

1 小学生は、本時の学習課題を確認する。

混声合唱の豊かな響きを味わおう。

2 簡単なクラス紹介をする。

3 演奏曲の説明を聞く。

4 混声合唱の演奏を聴く。

・ 本時は、合唱で様々な工夫により、その曲にふさわしい表現ができることを知る学習であることを説明し、活動への意欲を促す。

・ 互いの緊張をほぐすために、代表児童生徒に簡単なクラス紹介をさせる。

・ 演奏曲をより身近なものになるよう、わかりやすく説明させる。

(小学生)

・ 豊かな響きのある声をつくるには、発声練習をしたり、体をほぐしたりするなど、準備が必要であることに気づかせる。

・ 歌詞の内容や曲のイメージを伝えるには、表現を工夫することが大切であるということに気づかせる。

	(中学生)
5 感想を聞いたり、質問したりする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学生に自分たちの思いや気持ちが伝わるような合唱を心掛けさせる。 ・ 目の前にいる人たちに感動を与えるためには、歌詞の内容をイメージしたり、感じ取った曲想に合う表現をしたり、呼吸や発声に注意しながら歌ったりすることが大切であることに気づかせる。 ・ 合唱は練習を一生懸命にやったことが、結果となって表れたときの喜びや達成感が味わえ、楽しい活動になることに気づかせる。
6 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の活動について賞賛するとともに、感想を記入することで次時の活動への意欲を促す。

(3) 事前学習における「話し合う」生徒の様子

この授業実践の事前学習として、下記のことを行った。

第一次	○「合唱を通して伝えたいこと」No. 1 <ul style="list-style-type: none"> ・ 合唱練習を始めた頃と合唱が仕上がってからの気持ちの変化 ・ どんな気持ちで歌っているのか ・ 合唱を通して学習したこと ○合唱コンクールの映像を見た反省 ○合唱練習
第二次	○「合唱を通して伝えたいこと」No. 2 <ul style="list-style-type: none"> ・ どんな質問が予想されるか ・ 質問に対してどのように答えるのか考える ○合唱練習

事前学習の中で、「話し合う」活動をいくつか取り入れて実践した。生徒は、自分たちの演奏から、豊かな響きのある声で歌ったり、強弱や速度の変化など曲想を工夫したりすることが大切であることを、小学生に感じ取ってほしいという考えが多かった。そこで、第一次では、小学生に気づいてほしい音楽の諸要素について、4～5人の小集団で意見を話し合い、その後、全体での「話し合う」活動を行った。生徒が「話し合い」で挙げた音楽の諸要素は、「強弱・速度の変化・音の重なり・音色」だった。また、それ以外のことでは、「声の響き」や「歌詞の情景・イメージの共有」などを挙げていた。これを受けて、第二次では、生徒が挙げた音楽の諸要素などを、小学生にわかりやすく伝えるために、楽曲のもつ雰囲気やイメージを共有し、曲想を工夫する学習活動を取り入れた。これまで以上に、楽譜に気づいたことや話し合った内容を書き込む生徒が増え、生徒の興味・関心が高いと感じた。

これらの事前学習では、「楽曲のもつ雰囲気やイメージを共有する場面」と「パートや全体で曲想を工夫する場面」で、意見を交換し合う「話し合い」に取り組んだ。これまでも同様に、授業の中で意見を交換し合うことは取り入れてきたが、「話し合い」の内容がより高いものになった要因は、魅力ある授業内容であったことだと考えられる。

3 第3年次の研究（本年度）

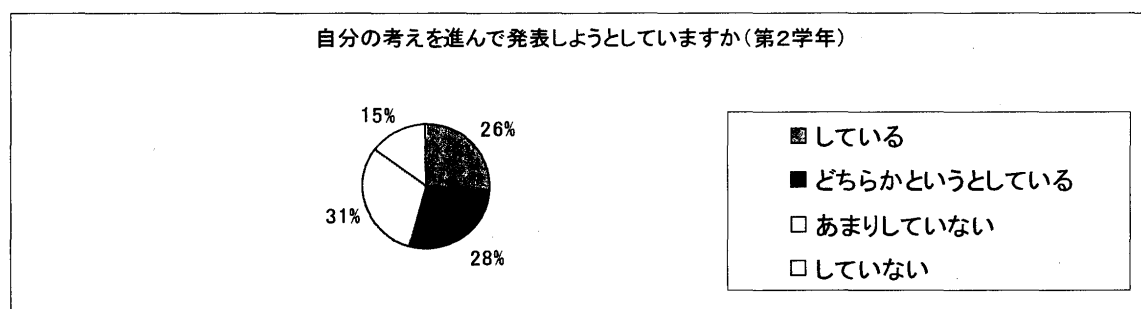
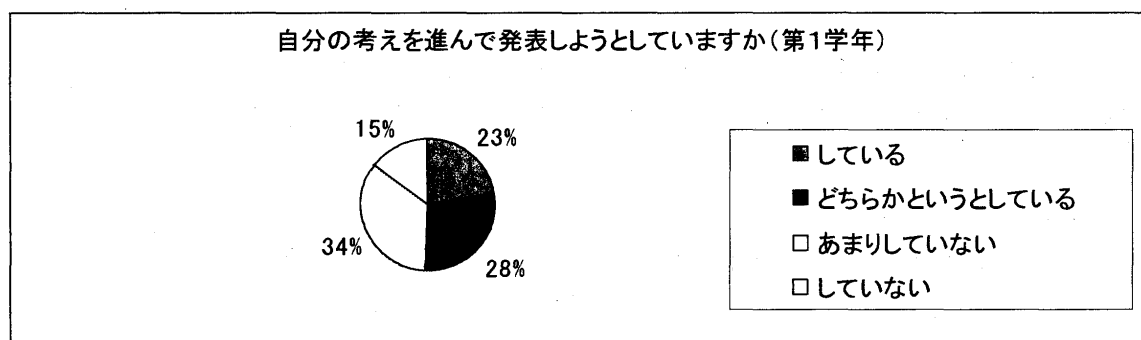
(1) 本校音楽科では、生徒の様子を知るために、全学年を対象として下記のようなアンケート調査を実施した。そこで、コミュニケーションする力に視点をあて、生徒がこの1年間でどのように変容してきたのか、第2・3学年について見取ることにした。

音楽学習におけるアンケート	
次の各項目は、授業中の活動や考えについてのものです。この項目をよく読み、あなたの授業中の活動や考えについて、あてはまるものを選びなさい。 また、⑨⑩⑪⑫については、具体的にわかりやすく書きなさい。（男・女）	
① 音楽は好きですか。 ア 好き イ どちらかという好き ウ あまり好きではない エ 好きでない	⑨ ⑧の理由を書きなさい。 _____
② ③④⑤は①で、ア・イと答えた人への質問です。	⑩ 課題をまず自分一人で考えたりできるようにしようとしていますか。 ア している イ どちらかというとしている ウ あまりしていない エ していない
③ 音楽のどのような学習が好きですか。（複数回答可） ア 歌唱（合唱も含む） イ 器楽（リコーダー、ギター、和楽器等） ウ 鑑賞 エ 創作（リズム、作曲）	⑪ わからなかったりできなかった時、あなたはどのようにしていますか。 ア 一人で解決しようとする イ 先生に質問する ウ 友だちに相談する エ 何もしない
④ ②の理由を書きなさい。 _____	⑫ 小集団活動（グループやパート）をする場合、どのような形態が好ましいと考えていますか。 ア 座席等をもとにしたグループ イ 指定されたグループ ウ 自由
⑤ 音楽のどのような活動場面が好きですか。（複数回答可） ア 個人での課題追求や練習の場面 イ 小集団（グループやパート）での課題検討や練習の場面 ウ 小集団（グループ）や全体で曲を合わせる場面 エ 小集団（グループ）で演奏を発表し合う場面	⑬ 小集団活動（グループやパート）をする場合、すすんで集団へ入ろうとしていますか。また、小集団の中で、積極的に友だちに自分の意見を伝えたり、友だちの意見を聞いたりしていますか。 ア している イ どちらかというとしている ウ あまりしていない エ していない
⑥ ④の理由を書きなさい。 _____	⑭ 自分の考えをすすんで発表しようとしていますか。 ア している イ どちらかというとしている ウ あまりしていない エ していない
⑦ ⑦⑧⑨は①で、ウ・エと答えた人への質問です。	⑮ ⑭でウ・エと答えた人への質問です。
⑧ 音楽のどのような学習が好きではないのですか。（複数回答可） ア 歌唱（合唱も含む） イ 器楽（リコーダー、ギター、和楽器等） ウ 鑑賞 エ 創作（リズム、作曲）	⑯ その理由として、考えられるものを選びなさい。（複数回答可） ア わからないから イ わかるけれど、表現することが苦手だから ウ 自信がないから エ 人前で話したり、表現することが好きではないから
⑨ ⑥の理由を書きなさい。 _____	⑰ 音楽学習の中で、「話し合う」活動はどんな場面がありますか。また、その場面では、どんなことに気をつけることが大切だと思いますか。 _____
⑩ 音楽のどのような活動場面が好きではないのですか。（複数回答可） ア 個人での課題追求や練習の場面 イ 小集団（グループやパート）での課題検討や練習の場面 ウ 小集団（グループ）や全体で曲を合わせる場面 エ 小集団（グループ）で演奏を発表し合う場面	

自分の考えを進んで発表しようとしていますか。

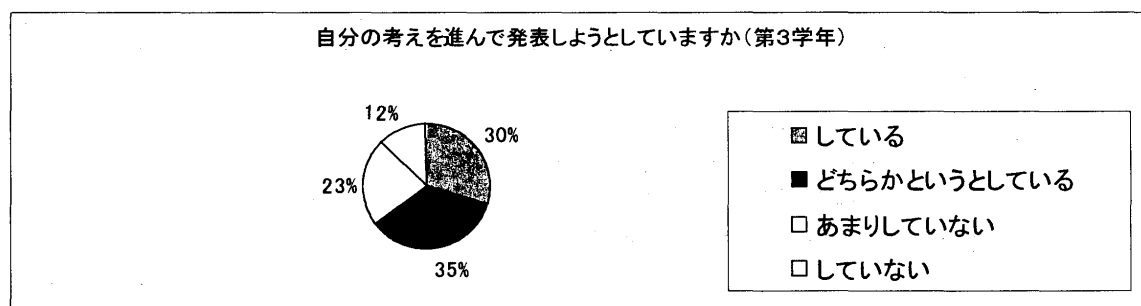
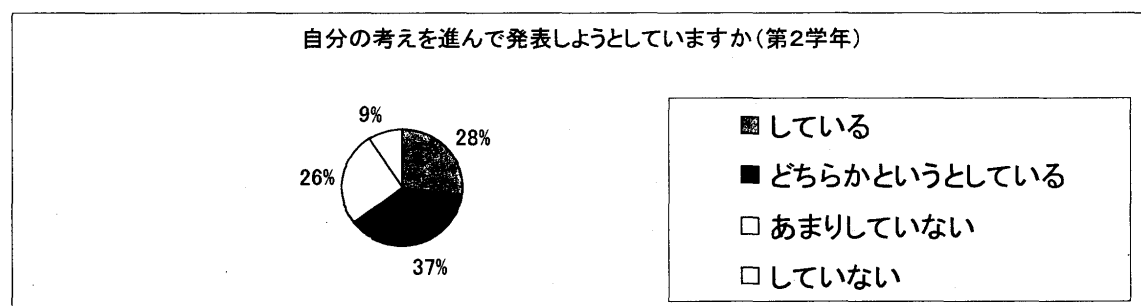
この設問については、生徒が音楽学習の中で、コミュニケーションするにあたり、どうとらえているか見取りたいと考えたものである。

(平成18年2月実施)



この設問に対して、授業改善を行った後、生徒はどのような変容が見られたのか。

(平成19年2月実施)



授業改善をしてきた3月のアンケート調査では、自分の考えを進んで発表しようとしている生徒が増えている事がわかった。これは発表しやすい環境作りや、良好な人間関係がもたらした結果であると考える。

(2) ともに学び合うよさを生かした学習活動により学力は高まったかの検証

音楽は、息や気持ちを合わせたりすることで得られる集団の心が一つになった喜びや言葉では言い表すことができないくらいの感動を味わったり、その感動を共有したりすることができる。

そこで、授業改善の視点を次の三つとして研究を進めている。

— 授業改善の視点 —

- ア 互いの音楽性やよさを感じ合い、様々な感性に触れることができる教材開発
- イ 体感することで表現する喜びを共有できる場の設定
- ウ 他者とのかかわりを意識した効果的な小集団学習

これらは、自分一人だけでは得ることができないものであり、他者との人間関係が大きく影響される。音楽は集団の中でこそ個が生きることを実感できる教科なのではないか。互いにアイディアや意見を出し合い、表現力や創造力を練り上げていくことができれば、きっと感動を共有できるであろう。そして、自分の音楽観のひろがりを実感することで、自分一人ではなく、他者と共に音楽をする喜びを味わうことができるのではないか。そのためにも、音楽の授業は共に学ぶ場、共に音楽をする喜びを分かち合う場であり、多様な価値観が響き合う場でありたいと考える。

そのためには、自然に他者とかかわり合うことができる場を設定し、よりよい音楽表現を求めて試行錯誤しながら追求しようとするのが大切となる。小集団の活動においては話し合いを取り入れることによって自己の表現に幅ができ、それらを表現することによって喜びを感じ、学力も高まったと言える。

(3) 実践例

次に、本年度行った実践の中から、小集団学習を取り入れ、「ともに学び合うよさを生かした場の設定」に着目した授業を紹介する。

題材は「和太鼓にも挑戦！アンサンブルだ！」である。最近では「太鼓の達人」などで知られるアーケードゲームやポータブルゲームなどでリズムを主体としたゲームが流行している。そのためか生徒も打楽器に対する興味が高い。そこで小集団でグループをつくりアンサンブルに取り組んだ。この活動を取り入れることで、生徒が主体的に練習し、良い作品を作り出すために活発な話し合いがもたれ、表現を工夫し、さらに課題を見つけていくことを本題の目標とした。さらには、和太鼓独特の身体表現から「間」や「所作」の大切さに気付く、日本の伝統音楽の奥深さを知ることができる考えた。

授業展開の工夫として、生徒達が活発な意見交換ができるために、打楽器の技術習得を徹底させることによって共通の話題ができると考えた。またイメージをふくらませるためにも毎回新しい演奏方法やサンプルを提示して生徒が意欲的に取り組める展開に努めた。

ア 授業改善のポイント

本題材は、今までもやってきたものだがより話し合いを活発にさせるための手だてとして、以下を位置づけた。

- ・同じ土俵で話し合いができるようにするため、和太鼓の技術習得のための時間を惜しまない。
- ・教師がコーディネーターとなり、意見が活発になるように支援する。
- ・間違わずに演奏することがすばらしい演奏ではないということを認識させ、表現するモチベーションを下げないようにする。また生徒が演奏したものに対して適切な教師の支援がなされるよう努力する。

イ 使用した学習プリント

学習記録用紙 「和太鼓にも挑戦! アンサンブルだ!」
1年()組()番 氏名()

- ◆教材名 「打楽器のための小品」
- ◆学習内容・・・和太鼓を使い、日本独特の表現を工夫して演奏する。

<第1次> 本時の目標

- 学習内容 ①「龍虎太鼓」を鑑賞する。
②バチの持ち方や和太鼓の打ち方など、演奏するための基礎を知る。
③いろいろな打楽器を知る。
④グループ分けをする。

<第2次> 本時の目標

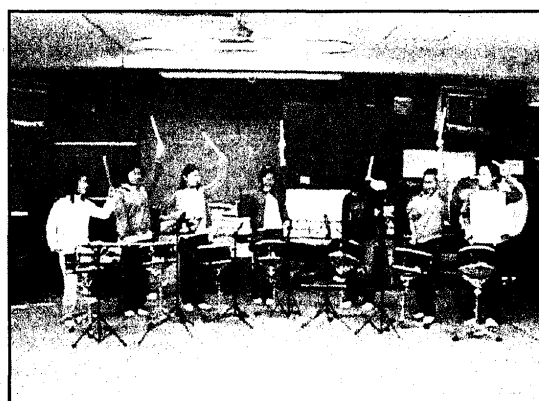
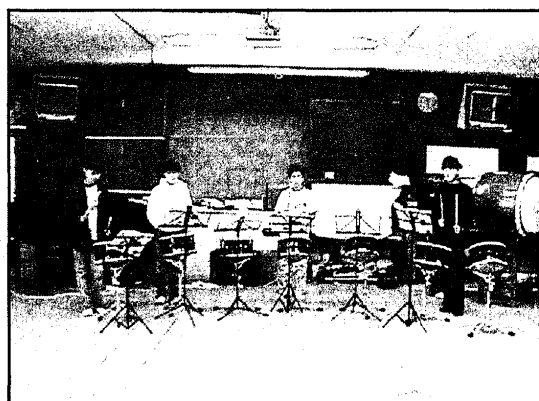
- 学習内容 ①グループごとに練習する。
②自分が工夫したい諸要素別にグループを作り、具体的に表現の工夫を考える。
③グループごとに自分たちが考えた表現の工夫を発表する。

<第3次> 本時の目標

- 学習内容 ①前時に考えた表現の工夫を確認し、グループごとに練習する。
②グループ発表する。

自己評価	①話し合いやグループ活動に意欲的に取り組んだ。	A	B	C
	②最後のグループでの演奏に意欲的に取り組んだ。	A	B	C
	③授業に意欲的に取り組んだ。	A	B	C

(発表の様子)



ウ 授業の考察

この題材では、この楽曲を友達と演奏してみたいという欲求から学習の楽しさを感じ取ったり、互いの演奏を聴き合うことや、既成の曲にアドリブを加えることにより表現の工夫の違いがあることに気付いたりするなど、学ぼうとする意欲を高められるような授業を展開した。生徒は、仲のよい友達と一緒に練習することで、うまく演奏できない時は互いに教え合って練習していた。これにより、和太鼓演奏の基礎・基本が徹底され、「できる楽しさ」を実感していた。また、リズムや強弱の組み合わせの仕方を工夫することで、生徒の興味・関心や技能の実態に応じた演奏形態や表現の工夫ができたという結果につながったと考える。

生徒の学習カードに、「アドリブの部分を自分なりに家で練習した」「アンサンブルは、一人の演奏よりも呼吸合わせなどが難しいが、みんなで合った時はうれしく思う活動だ」

「みんなで協力して演奏する楽しさ、全員でぴったり合った時は感動した」「すべて私たちのオリジナルでやってみたい」「自分たちで考えて工夫した部分が上手に演奏でき、聴いている人たちの感想にそのことが書かれていたことがとてもうれしかった」という言葉があった。

自分たちで自由にアドリブ部分を創作できるという点は、意欲につながりやすい。ともすると創作活動は難しいとか、めんどくさいとか、生徒は思いがちであるが、教師の巧みな支援により創作に対する苦手意識ほとんどなくすことができる。楽曲を練習してつくりあげていく過程を通して、表現の工夫による楽曲の表情の付け方、適正な速さ、アンサンブルの仕方などを学ぶことができ、これらは音楽の基礎・基本につながる。そして、自分たちなりの表現を工夫した演奏を発表した時、「できた」という気持ちと同時にわき上がる感動をかみしめる生徒の姿が見られた。これは、まさに音楽学習の価値を見出すことができた瞬間であったと考える。

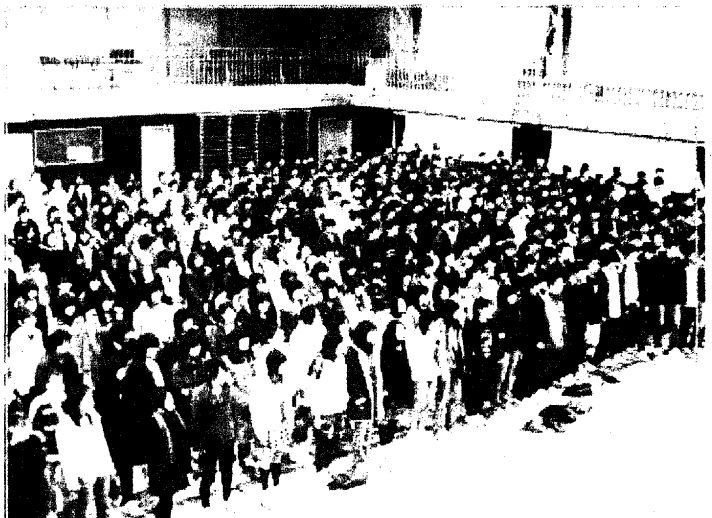
4 研究のまとめ

(1) 研究の成果

3年間の研究の結果、音楽の授業において表現する喜びが味わえる状況は、自分の工夫した表現が他者に伝わったときに得られるという事がわかった。音楽の授業ではほとんどが他者とのかかわり中での活動である。こうした活動には、他者との間に心と心のコミュニケーションをする姿がある。音楽を表現するときに、他者とのかかわりの中で音楽のよさを共感できたり、表現する喜びを共有したりすることで、自分のもつ音楽そのものが成長していくものだと考える。また生徒の学習意欲を喚起することができる創意工夫がある題材、学習内容や指導が、音楽に対する学習意欲や期待感を継続させる事に大切なこともわかった。特に、そのときの状況による導入の仕方、生徒と接するときの会話、励ましや疑問への対応など、音楽がしやすい環境づくりは大切である。教師は溢れんばかりの音楽で生徒に表現することで、より表現する喜びを実感できるということがわかった。

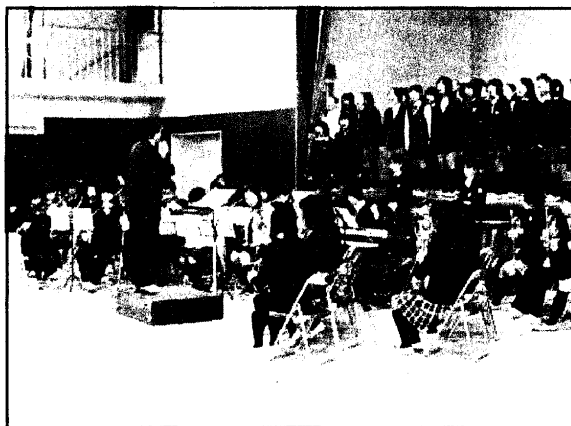
毎年、年末に行われる学校行事「ベートーヴェンの第九を歌おう」では、本研究の成果を具体的に見ることができた。一人一人が育て上げた自分の音楽を第九の歌詞（ドイツ語）にのせて表現し、他者もそれに呼応し、表現する喜びを共有し味わっていた。

生徒の振り返りノートに「今年の第九はいつもと雰囲気が違いなんだか歌わずにはいられなかった」「高校に行っても第九をやりたい」「恥ずかしい気持ちなんて忘れて思いっきり歌えた」「去年までは間違うのが怖くて歌えなかったけど今年はなんかわからないが歌ってしまった」「歌い終わってみんなでやったという気持ちになった」「こんなに歌で感動したことはは



第九合唱の様子

じめてだったし音楽っていいなと思った」などほとんどの生徒が喜びを感じ取っていた。このようなことから、本研究は、ともに学ぶよさを生かした学習活動を通して、表現する喜びを味わう生徒の育成を目指す上で有効であったと言える。



(2) 今後の課題

常に技能の習得や他者とのかかわりの中で、表現する喜びを感じ取らせるようにしなければならない。そのためには、教える側の教師は、自分の持つ音楽を更に向上させなければならない。また表現しやすい環境作りや、良好な人間関係に常に気を配らなくてはならない。そして生徒が表現してくる音楽に対して全身で受け止めともに学んでいかなければならない。

【引用・参考文献】

- ・日本学校音楽教育実践学会編：「音楽の授業における楽しさの仕組み」，2003年
- ・芸団協，芸能文化情報センター編：『なぜいま学校で「表現教育」なのか？』
2003年
- ・宇都宮大学教育学部附属中学校：「第50回公開研究発表会要項」，2004年
- ・宇都宮大学教育学部附属中学校：「第51回公開研究発表会要項」，2005年・